鼻音／n／にかかわる同化作用

遠　藤　幸　子

Assimilations of /n/

Sachiko Endo

要旨：

鼻音 /n/ は隣接の子音によって変化を受けやすく、また隣接音に変化を与える。本稿では実際にどのような音変化が起きているのかを分類整理し、同化作用によるものとそうでないものを分別して、同化作用によるものに関して整理する。同化作用がどの音との間で起きるのか、それがどの程度確立しているのかを表にまとめる。

鼻音 /n/ がどうして同化作用を受けやすく与えやすいのかについての考察を行い、その理由と思われる点について自説を展開する。

キーワード：

1．鼻音　　2．/n/　　3．同化作用　　4．調音様式　　5．調音点

はじめに

Hawkins は '*Introducing Phonology*' の中で、子音の変化を 'voicing' 'place' 'manner' の三つに分け、place の変化は assimilation の結果起こることが多いと述べたうえ、鼻音に関して次のように述べている。

'Nasals are particularly prone to assimilate to a following consonant.' (p.272)

鼻音が同化作用を受けやすいということは経験的にも認識されるが、実際にはどのような変化を起こしているのであろうか。また、鼻音は隣接音の影響を受けるだけでなく、与える場合もあるが、それはどのような場合であろうか。

本稿では鼻音のうち /n/ をとりあげ、歴史的音変化をも含めながら、鼻音 /n/ が隣接の子音からどのような影響を受けているのか、また、どのような影響を与えているのかを検証し、鼻音 /n/ と隣接子音との関係を整理する。鼻音のうち /n/ を取り上げたのは、この音が [n] から [m],[ŋ] と変化し、鼻音の中で最も変化しやすいと考えるからである。

言語音が隣接音によって変化を受けることを同化作用と言い、調音様式、調音点、声帯の働きの観点から、次の 3 種類がある。

① 調音点が同じになるか、近づく。

② 調音の様式が同じになるか、近づく。

③ 発声が同じになる。

本稿では変化の過程の一部にでも上記の 3 つが関わっている場合を同化と考えて検討をすすめる。

Ⅰ．鼻音 /n/ と隣接音との関係

鼻音 /n/ はどのような子音に隣接した場合、どのような変化を受け、あるいは与えるのか、調音様式と調音点に従って、それぞれの変化を見てみる。

鼻音 /n/ の隣接音となる子音の分類については、表１の子音表を使用する。半母音は除外する。

Ⅰ－1　両唇音に隣接する場合

Ⅰ－1－1　閉鎖音 /p/, /b/ に隣接する場合

例１ import, embank

例２ impossible, imbalance

例３ complex, combine

例１と２の語は preifix の in- が語頭についたものである。例１は「into, in, within, on, upon, towards, against」などの意味を表す in-、例２は否定を表す in- である。

例１の in- はラテン語に由来する。初期ラテン語では in- はすべての子音の前で変化なく使われていたが、その後後続の子音により同化作用を受けた。l の前では l (ex. illuminate)、r の前では r (ex. irradiate) に変化し、両唇音の前では両唇音化して im- となった。英語においてはこの変化がそのまま保持された。この in- は古フランス語で en- に変化し、両唇音の前では em- となった。このため en-, em- はフランス語系の場合が多い。(ex. enrich, embrace)

例２の in- もやはりラテン語に由来する。形容詞の接頭辞として使われ、否定、あるいは欠如を表す。例１の in- と同様の同化作用を起こして、両唇音の前では両唇音のmに変化し、l の前では l (ex. illegal)、r の前では r (ex. irregular) に変化した。

ラテン語の否定の in- に対応する古英語 (OE) の un- はやはり否定を表し、この接頭辞のついた語は古英語で約 1250 語あったと OED には記されている。しかし、中英語以降にはその８分の1しか残らなかった。古英語でも、中英語で新しく登場した語も、あるいは現代英語まで残ったものも、この un- の /n/ は両唇音の前でも [n] を保っているように思われるが、竹林は「・・・un の /n/ も自然な発話では当然・・・同化の作用を受け、・・・」(p.348) と述べ、現代の辞書がそれを反映していないと述べている。

例３は同化作用を起こした結果ではなく、もともとラテン語の com-（共に）という前置詞からできた接頭辞がついたもので、多くの場合に com- は con- となった。(ex. contain) 唇音と母音で始まる若干の語の前では m を保持し、r と l の前では同化され (ex、correct, colleague)、母音、h, gn, n の前では脱落した。(ex. coordinate,

表１　英語の子音

調音様式／調音点	両唇音	唇歯音	歯音	歯茎音	硬口蓋 歯茎音	軟口蓋音	声門音
閉鎖音	p b			t d		k g	
摩擦音		f v	θ ð	s z	ʃ ʒ		h
破擦音					tʃ dʒ		
鼻　音	m			n		ŋ	
側　音				l			

cohabit, cognate, connect)

従って combine の場合には後続の b に同化されたというより、後続の b のために保持されたのである。

p の前で n を保ち、conp- というつづりを持つ語は OED でも数えるほどしかないが、すべて comp- という形のバリエーションであり、また、conb- というつづりを持つ語は2語しかなく、一語は16世紀以後廃語となり、もう一語はスコットランド方言で、この語も既に廃語となっている。(以上 OED, con-, com-, in- の項)

現代の英語では in Paris や gone back のような場合、鼻音 /n/ は唇歯音化し、[ɱ] が聞かれる。

また、Jack and Betty なども場合も and は [əm] と発音される。(島岡・佐藤, p.64)

両唇閉鎖音と鼻音 /n/ の関係をまとめると、鼻音 /n/ は両唇閉鎖音により同化されやすく、その結果歯茎音である鼻音 /n/ は両唇音化する。

I－1－2　鼻音 /m/　に隣接する場合

例 4　autumn

例 5　immature

例 6　entertainment

鼻音 /n/ は /m/ に隣接する場合 silent になる。特に語尾にある -mn の場合は黙字となる。他に damn, condemn, solemn, column, hymn などの例がある。このような n の音の消失は 15 世紀から例があると安井稔は述べている。(「音声とつづり字」p.46)

例 5 の immature は否定の in- が語頭についた場合だが、/m/ と同化している。他に immaterial, immobile, immortal なども同様の例である。これらの語では [n] が [m] に同化した後、[m] がひとつだけが発音されるようになったと考えられる。

例 6 のように、動詞に -ment という語尾が続く例では [n] は発音されなくなる場合と、そうでない場合の両方がある。government, environment などでも [n] が消失する場合と保っている場合とがある。

以上の例から、両唇音の鼻音 /m/ は鼻音 /n/ を両唇音化させる。両唇音は閉鎖音も鼻音も鼻音 /n/ に対して強い同化力を持っていると言える。

I－2　唇歯音に隣接する場合

I－2－1　摩擦音 /f/, /v/ に隣接する場合

I－1における否定、あるいは「中へ」という意味を持つ in- という接頭辞は唇歯音の前では同化されなかった。

例 7　informal

これは否定をあらわす接頭辞 in- に唇歯音 [f] が後続する場合である。他に infant, infinite, infamous がある。すべてラテン語由来である。informal の英語初出は 15 世紀、その他の語は 14 世紀から記録がある。ここでは [f] の前で [n] が保たれている。

例 8　infect

これは「中へ」という意味をもつ in- を接頭辞として持つ語である。他に inform, infuse, inflect, influence などがある。これらの語もラテン語由来で 14 世紀から 15 世紀にかけて英語に入ってきた。

in- が「否定」、「中へ」のいずれの意味をもつものであっても、鼻音 /n/ が後続の [f] によって同化されている例は見られない。

例 9　invalid

[n] に [v] が続く例としては他に canvas, convert, convict などがある。鼻音 /n/ には同化が見られない。

しかし、次のような例も見られる。

例 10　comfort

OED の com- の項によると、多くの子音の前で con- に変化した com- であるが、英語に入って

からfの前でcon-でなくcom-が使われる例があるとして、comfortが挙げられている。comfortは古フランス語（OF）のconfortが13世紀に英語に入り、その後comfortとなったものである。リーダーズ英和辞典にはcomf-の他の例としてcomfit, comfiture, comfreyがあげられている。しかし、comf-よりconf-のつづりを持つ語が圧倒的に多い。

例11　Humphrey

また、Humphreyのような例もあるが、この語は古英語のhun（bear-cub、warrior　あるいは種族名）+ frid（peace）からなるので、明らかに[n]が[m]に変化した例である。[m]への変化はつづりのpによるものという可能性もあるが、すでに1086年にDomesday BookにHumfridusと記録されているので、音による同化と思われる。

鼻音/n/は/v/によって同化されるとは言い難いと思われるが、Davenportはin vainの例を挙げ、i[ɱv]ainとなると述べている（p.31）。[ɱ]は唇歯音化した鼻音を表す。つまり、鼻音/n/は同化されているのである。ただし、両唇音による同化と異なり、完全に異なる音素となったわけではない。

Ⅰ－3　歯音に隣接する場合

Ⅰ－3－1　摩擦音/θ/, /ð/に隣接する場合

例12　on Thursday

この場合、Davenportはo[n̪ θ]ursdayとなると述べている。（p.31）[n̪]は歯音化した[n]である。また、島岡丘・佐藤寧でもｔｈの前で[n̪]が聞かれると述べられている。（p.64）Ladgefogedはこのような例としてtenth, in theをあげている。（p.92）

これらの例は歯音が鼻音/n/を同化した例と言えるが、音素の変化までは起こさせない。

例13　tooth　（OE　tōTH,[i]）

この語はインドヨーロッパ語族に共通する祖語＊dont－から派生した語である。古フリジア語toTH, tond, 古スカンジナビア語tand, 中オランダ語tant, オランダ語tand, ゴート語tunTH, であり、古英語の祖先とも言うべき古ゲルマン語は＊tan-あるいは＊tunTHであったと推定されている。nにTHが隣接していた古ゲルマン語ではnが消失し、ｔおよびｄが隣接した場合はnが保持されている。

mouTHもまた古ゲルマン語では＊munTHo-zと推定されており、やはりnを持っていたが、消失した。

toothやmouthの例を見ると、THによって/n/が同化され消失したという推測もありうるが、これらの語の場合注目すべきは/n/の消失の前後でその前の母音の長さが異なっているという点である。これはいわゆるCompensatory Lengtheningである。

Compensatory Lengtheningとは短母音に後続する鼻音が消失し、その代償として前の母音が長母音化するもので、古英語以前に起きた変化である。この変化では/f/, /θ/, /s/の前で/m/, /n/が消失し、母音が長くなる。/θ/のみでなく他の無声摩擦音の前でも起こる変化である。古英語においてはtenの序数の場合にこのような変化が起きている。

先行母音の長母音化の際には鼻音/n/による母音の鼻音化が起こっている可能性があるが、本稿は鼻音/n/と子音との関係を問題とするので、ここでは追及しない。

Ⅰ－4　歯茎音に隣接する場合

Ⅰ－4－1　破裂音/t/, /d/に隣接する場合

例14　twenty

この語は[tweni]と発音されることがある。これがどのようなプロセスで起こるのかを竹林1996によって述べてみたい。竹林はLadefogedを引用

して次のように説明している。(p.206、pp.345-5)

① [twenti] の [t] が強弱の母音にはさまれた場合弱化してたたき音 (tap) 化する。

② [n] も鼻音化たたき音となる。

③ [t] のたたき音が [n] の鼻音化たたき音により同化され、鼻音化たたき音になる。

④二つの鼻音化たたき音が合体してひとつになる。

⑤ /t/ が脱落した印象を与える。

以上が竹林の説明である。⑤で /t/ が脱落した印象を与える、とあるので、結果的には [tweni] と聞こえるわけである。

この過程ではまず [t] と [n] のたたき音化が起こり、その後 /n/ により /t/ が同化される。

このような [t] の脱落は「同じ環境にあっても語によってまちまちで、辞書の発音表記に示されているように画一的にはおこらない.」(竹林、p.345) と述べられているが、この過程に含まれているのは鼻音化した音による同化であり、すなわち鼻音 /n/ による同化作用の一つと言えるであろう。

竹林が実際に /t/ の脱落を耳にした例として、次のような語をあげている (p.345)。

carpenter, counter, Del Monte, enter, painting, plenty, quantity, winter, want to

このような同化の例で、辞書項目にもなっているのは wanna でこれは want to の発音つづりであり、同化の結果が定着したものである。

例 15　button

Trask は button の /t/ の発音について、nasal release (口腔内の閉鎖を保ったまま軟口蓋を下げる) という説明をしている。この時起こっていることは、解放を伴うはずの閉鎖音である /t/ の開放が起こらず、鼻腔へ空気を流す、ということである。この場合 /t/ の音は必ず鼻音化されるはずである。

この発音は常に聞かれるのではなく、Trask も 'as is the /t/ of button for many speakes.'(p.234) と言って、このような発音をする人が多いことを述べているにとどまる。

例 16　handkerchief

この例では、[d] は発音されない。いわゆる黙字となっている。これについて安井稔は次のように述べている。

'[n] が先行する [d] は消失して黙字となる。[d] が [n] と他の子音 (h,l,r.w.hw,y を除く) の間にある場合である。' (P.42)

さらに同書では [n] に隣接する [d] の消失について次のように述べている。

'n との結合において d の消失が多いのは、mb の結合の場合と同様、2 音が調音点を等しくし (homorganic)、軟口蓋が上がって鼻への呼気をふさいでいるかどうかの差があるのみで、その上下が一瞬早いか遅いかによって [nd] とも [n] ともなるものであるからである。' (p.43)

/nd/ を発音する際に軟口蓋が一瞬遅く上がった場合、つまり、/d/ を発音する際にまだ上がっていない場合には、鼻腔に空気が流れ、発音された音は鼻音化するはずである。

鼻音 /n/ と調音点を等しくする語が鼻音 /n/ によって同化されるということは鼻音化されるということである。

すなわち、[nd] でなく [n] となった場合には [d] は [n] によって鼻音化され同化され消失したということができる。他に handsome, grandfather, grandmother などの例がある。

上記の引用からも明らかであるが、[nd] と [n] は交替しやすいということになる。[d] がある条件下で黙示になりやすいと同時に、それ以外の条件下では逆に [n] が [nd] になる可能性もあるということである。その例として、thunder　があ

る。この語は古英語では THuner であったが 13 世紀から THunder という形が登場し、その後この余剰的な d の入った綴りが定着した。sound, kindred の d も余剰的である。

[n] に隣接する [d] に関しては、[d] が [n] と他の子音（h,l,r.w.hw,y を除く）の間にある場合という条件下において同化作用が起こっていると考えてよいだろう。

例１７　listen、 often

歯茎破裂音 /t/ が鼻音 /n/ の前にあり、その前に /s/, /f/ がある場合に黙字となる。すなわち [stn], [ftn] という音連鎖の場合、間の [t] が発音されなくなる。このほかにも fasten, chasten, moisten, chestnut などの例がある。

この例は [t]、[n] という破裂音が続くため、/t/ の破裂をせずに後続の鼻音 /n/ と一緒に破裂を一回だけするために起こったもので、/t/ は後続の鼻音 /n/ の影響で鼻音化し、その後 /n/ に吸収されて消失したと考えられる。

歴史的には winnow がある。この語は古英語の windwian（もみ殻から扇ぎわける）から発達した語である。14 世紀から d のない形が登場し、それが定着した。

歯茎閉鎖音と鼻音 /n/ とはもともと調音点が同じであり、また同じ閉鎖音なので、同化作用が起こるとすれば有声音である鼻音 /n/ に同化されて /t/ が同化されるかどうかであるが、listen などの場合には /t/ の鼻音化が起こっていると考えられ、前に /s/, /f/ がある場合という条件付きで同化作用が起こっていると言えるだろう。

Ｉ－４－２　摩擦音 /s/, /z/ に隣接する場合

例 18　goose　（OE　gōs）

goose は OE で gōs であった。古ゲルマン語では＊ gans- と推定されている。英語に入る前に鼻音 /n/ が消失し、前の母音が長母音化した。この変化は tooth などの変化と同じ Compensatory Lengthening である。

このような例は多くは残っていない。OE　fus（熱心な）は古ゲルマン語の *funso から由来している語で、最後の例は 1460 年、fous となっている。現在は廃語である。また、boose（牛小屋）は 15 世紀に初めて文献に記録されているが、OE bōs から発展したと考えられ、古ゲルマン語の＊ banso-z に由来すると考えられている。以上の 2 語は語源と後の発達をみると、Compensatory Lengthening の例と考えられ、同化作用ではない。

Ｉ－４－３　側音 /l/ に隣接する場合

例 19　kiln　（OE　cyline、cylene、cyln (e)）

この語はラテン語の culina（台所）と同源の語で古英語では 750 年ごろ cylne という形で記録がある。15 世紀から n の消失した kylle,　kyll、kell という形が記録されている。 n のあるつづりが残ったが、現在では綴りは kiln であるが、発音は [kiln] と [kil] の両方が残っている。

このように l に後続する [n] が消失する例は mill などにもみられる。古英語で mylen あるいは myll という形が残っているこの語はラテン語の molina と同源の語である。mill は古英語時代から [n] をあらわす n のあるつづりとないつづりが併存し、結局 n のないほうが残ったものである。[l] の後の [n] の消失の原因であるが Hawkins は epenthesis（音挿入）について次のようにのべている。

> '…an [ə] vowel is inserted into the words, film, kiln and athletic, to break up the unfamiliar sequences /-lm, -ln/, and /-θl/.' (p.267)

すなわち /-ln/ という音のつながりは英語の発話者にとってはなじみのない音であり、それをな

くすために母音を挿入するというのである。とすれば、発音しにくい音の連鎖をなくすためには、そのうちの一音を消してしまうという方法もあるわけである。/n/ はそのため発音されなくなり消失したと考えられる。

この変化は同化作用とは考えられない。

I－5　硬口蓋歯茎音に隣接する場合

I－5－1　摩擦音 /ʃ/, /ʒ/ に隣接する場合

例 20　pinch

[nʃ] という音の連続がある場合、[ʃ] が歯茎音を帯びて [tʃ] が聞かれる場合が想定される。竹林は「添加」という説明をしている (p.346)。/nʃ/ というつながりがある時、/n/ の音が終わる時点で鼻腔への空気の流れが止まり、声帯の振動が止まる。次に /ʃ/ を発音する際には口腔を開放するわけだが、その開放が一瞬遅くなるとそこで鼻音 /n/ ではない無声の閉鎖音が発せられる。それが鼻音 /n/ と調音点を同じくする歯茎音の /t/ である。/ns/, /nθ/ の場合にも同じことが起こる。

pinch という語は古ノルマンフレンチの *pinchier から pinche (n という形で 14 世紀に英語に入った語である。現在この語の発音は通常 [pintʃ] とされているが、OED では語尾の音は [(t) ʃ] となっており、[pinʃ] という発音があることが示されている。フランス語においては、前母音の前の ch は [ʃ] を表すので、この語は [nʃ] という音から [ntʃ] という音に変化した可能性を示している。しかし、英語に pinchen という形ではいっているので、英語では ch は前母音の前でも [tʃ] という音を表すため、つづりにひかれて [tʃ] となった可能性もある。従って、純粋に音の変化であるのか、つづり字発音であるのか判断が難しい。

ganch という語はフランス語の *gancher から 17 世紀に英語に入った語で、gansh というつづりも記録されている。現在は [gæntʃ] という発音であるが、gansh というつづりは語尾が [ʃ] であったことを示していると思われる。[ʃ] という音と、ch というつづりを持って英語に入った語が音に合わせて sh というつづりを獲得する一方、つづりに合わせて [tʃ] という音を獲得したのではないかと考えられる。いずれにしても /ʃ/ が鼻音化したとは言えず、鼻音 /n/ の /ʃ/ に対する同化作用は証明できない。

I－5－2　歯擦音 /tʃ/, /dʒ/ に隣接する場合

Davenport は歯擦音はほとんど同化することはないと述べているが、鼻音 /n/ に後続する場合、歯擦音の閉鎖音部分が脱落して発音される場合があるとして、lunch に lun[ʃ]、sponge に spon[ʒ] が聞かれることを述べている。(p.27) この場合は鼻音 /n/ と同じ歯茎音である [t][d] の発音を省略した形となる。

また、Jespersen は古くから /ntʃ/ が regularly に [nʃ] になるとのべ、French が /frenʃ/ となる 1569 年の例をあげている (p.223)。

しかしこれらの例は /tʃ/ が鼻音 /n/ によって同化されたという例ではない。

1－6　軟口蓋音に隣接する場合

1－6－1　閉鎖音 /k/, /g/ に隣接する場合

例 21　ink

この語はもともとは [ink] という音を持っていたのが、[n] が後続の [k] の影響を受けて軟口蓋化し、/ŋ/ という音に変化した。調音点が同じになった同化である。

例 22　know

語頭の [k] はもともとは発音されていたものである。[n] が無声化してその後 [k] が消失したとする説もあるが、gnaw などの場合にも起こる変化なので、むしろ鼻音 /n/ により鼻音化されたと言っていいだろう。すなわち、/tn/ などの場合と同じ

く、/k/ に nasal release が起こっているのではないかと考える。この変化は 17 世紀ごろ起こったとされている。

例 23　king

この語は [king] という音を持っていたのが、[n] が後続の [g] の影響を受けて軟口蓋化し、[kiŋg] となった。この時点では [ŋ] は /n/ の異音であったが、後に king の語尾の [g] が脱落して king[kiŋ] と kin[kin] の対立が生じ、/ŋ/ が独立の音素になったもので、その時期は近代英語の時代になってからである。[ŋg] の場合は軟口蓋音の有声音が続くので、余剰的と感じられたため [g] が脱落したと考えられる。

Sweet によると、この音素に最初に言及したのは Alexander Gill (1565-1635) である (p.269)。すなわち /ŋ/ は 16 世紀から 17 世紀にかけて成立したものと考えられる。

例 24　gnaw

これも [kn] と同様語頭の [g] は発音されていたが、同様に鼻音化の後消失した。例は少なく、gnarl, gnash, gnat などが Jespersen (p.352) にあげられている。

軟口蓋音と鼻音 /n/ との関係をまとめると以下のようになる。

軟口蓋音と鼻音 /n/ の間には同化作用が起こる。鼻音 /n/ が先行する場合は後続音に同化される。これは調音点の同化である。鼻音 /n/ が後続する場合は先行音を同化する。これは調音様式の同化である。

I－7　声門音に隣接する場合

I－7－1　摩擦音 /h/ に隣接する場合

現在の英語では [hn] と続く音はない。しかし OE では hnecca (neck), hnut (nut) などがあった。これらの語の h は中英語の時代には消失している。しかし、古英語では hw-, hn-, hl-, hr- を持つ語の場合、h はすべて消失しているため、この消失が後続の鼻音 /n/ による同化とは判断できない。

II　結論

以上、様々な環境における [n] が隣接音に与える影響あるいは隣接音から受ける影響について述べてきたが、ここで全体をまとめてみたい。

表 2 は [n] に隣接する子音の変化と例語を一覧にしたものである。

表 2 を同化の度合いを示す表として書き換えてみる。ここで使用するしるしは次のような意味を持っている[ii]。

左のしるし (同化の程度)

◎ Full Assimilation 完全同化 (同じ音となる)

○ Paritial Assimilation ①(同じ調音点となる)

× Partial Assimilation ②(近い調音点になる)

△ Conditioned Assimilation (ある環境化で同じ音となる)

右のしるし (確立の程度)

◎ Established Assimilation (辞書に載っている)

○ Unestablished Assimilation (発話中に一時的におこる)

表3より、本稿の結論として、以下の点をあげる。

1. 鼻音 /n/ は以下の子音以外の子音との間に同化作用がおこる。
   ①歯擦音
   ②側音
   ③調音点が同じかあるいは奥の摩擦音
2. 鼻音 /n/ との間に同化が生じる音については以下の事がいえる。
   ①閉鎖音は鼻音 /n/ との間に強い同化関係がある。
   ②両唇音は鼻音 /n/ との間に強い同化関係がある。

表 2　鼻音 /n/ と隣接子音の変化

	両唇音	唇歯音	歯音	歯茎音	硬口蓋 歯茎音	軟口蓋音	声門音
閉鎖音	np>mp (impossible) nb>mb (combine) pn>pm (open) bn>bm (ribbon)			tn>n (listen) dn>n (Wednesday) nt>n (wanna) nd>n (handsome)		nk>ŋk (ink) ng>ŋ king kn>n (know) gn>n (gnaw)	
摩擦音		nf>mf (comfort) nv>ɱv (in vain)	nθ>n̪θ (tenth)	s	ʃ ʒ		h
歯擦音					tʃ dʒ		
鼻　音	nm>m (immortal) mn>m (autumn)			n		ŋ	
側　音				l			

表 3　同化の程度と確立の程度

	両唇音	唇歯音	歯音	歯茎音	硬口蓋 歯茎音	軟口蓋音	声門音
閉鎖音	○◎			△◎		○◎	
摩擦音		×○	×○	s	ʃ ʒ		h
歯擦音					tʃ dʒ		
鼻　音	◎◎			n		ŋ	
側　音				l			

③鼻音 /n/ より調音点が前の摩擦音は鼻音 /n/ との間に部分的であり偶発的な同化関係がある。

3. /n/ に関する同化と調音点の関係

① /n/ より調音点が前の音は /n/ を同化する。

② /n/ と調音点が同じ音は /n/ により同化される。

③ /n/ より調音点が後の音は同化する場合とされる場合がある。

以上の結果から、Hawkins の述べるように「鼻音は同化しやすい」と言えるであろう。特に鼻音 /n/ は同化しやすいことが明らかとなった。

なぜ鼻音は同化しやすいのか。それは、鼻音という音のもつ基本的な性質によるものであると考える。

鼻音の特徴は口蓋垂を下げて鼻腔へ空気が流れることによって出る音であるという点である。我々は鼻音を出そうと思えば出すことができるが、はたして口蓋垂を上下させようとした場合それを動かすことが可能であろうか。他の子音を発音する場合、例えば両唇閉鎖音を発音する場合、我々は意図的に唇を閉じ、また開くことができる。摩擦音の唇歯音を発音する場合には、意図的に唇と歯を接触させ、空気の流れを一部妨げることができる。その音を出すための発音器官を意図的に動かすことが可能である。

しかし、鼻音の場合はどうであろうか。鼻音を出すために口蓋垂を下げる、ということが、意図的に可能であろうか？我々は今自分の口蓋垂が上がっているのか、下がっているのかを認知できるであろうか。これが認知できるのは鼻音を発音してみて、すなわち鼻音が発声できてやっと、「今口蓋垂が下がった状態である」と言えるのである。

このことはすなわち、口蓋垂は随意に上下できず、また、口蓋垂が上がっているのか下がっているのかは認知できない、ということになる。となると、口蓋垂が上がっている状態のつもり、すなわち鼻音を発音しているのではないつもりでいても、実は口蓋垂が例え完全にではなくとも下がっていて、鼻腔へ空気が通い、結果的に鼻音が、あるいは鼻音化された音が発せられるということが起こっているのではないだろうか。従って鼻音 /n/ と同じ調音点（歯茎音）で /n/ と同じく継続性がマイナスである閉鎖音は無意識のうちに鼻音化されやすい、すなわち同化されやすいということになる。歯茎音でも継続性がプラスである /s/, /l/ などは同化されない。

また、鼻音 /n/ は同化されても鼻音であるという性質を失わない。両唇音化 [m], 唇歯音化 [ɱ], 歯音化 [n̪], 軟口蓋化 [ŋ], と変化してもあくまでも鼻音であるという特性は失わない。これは例えば give me が [gimi] となって摩擦音から鼻音へ変化したり、months の [θs] が [ts] となって摩擦音から閉鎖音に変化するのと異なる点である。

鼻音は鼻音であるという性質を失うことなく、調音点のみが同化を受けるのである。

以上を図式化すると、表4のように表される。

表4　同化の図式

nがtを同化する場合

	n	t	>	n	n
調音様式	鼻音	閉鎖音	>	鼻音	**鼻音**
調 音 点	歯茎	歯茎	>	歯茎	歯茎
継 続 性	—	—	>	—	—

nがpに同化される場合

	n	p	>	m	p
調音様式	鼻音	閉鎖音	>	鼻音	閉鎖音
調 音 点	歯茎	両唇	>	**両唇**	両唇

同化による変化は太字の部分だけである。鼻音

/n/ は同化される場合も同化する場合も鼻音性という性質に変化はない。隣接音を鼻音化するか、鼻音性を保ったまま隣接音の調音点に近づくかである。調音様式も、調音点も同時に変化するのに比較すれば、やはり、変化はしやすいと考えられる。

なぜ鼻音 /n/ は同化しやすいのか。その答えの一つが以上である。

注)

[i] [θ], [ð] を表すためにÞ や ð を使用していた時代の語彙に関して、わかりやすさを重視して本稿ではÞ, ð の代わりに TH というつづりを使用する。

[ii] ここで使用している Assimilation の種類のうち、Conditioned Assimilation と Unestablished Assimilation は本稿独自のものである。

参考文献

Campbell, A. Old English Grammar. Oxford.1977.

Carr, Philip, 竹林滋、清水あつ子訳 .『英語音声学・音韻論入門』 研究社、2002.

Davenport, Mike & S.J. Hannahs. *Introducing Phonetics & Phonology*. London: Arnold, 1998.

Hawkins, Peter. *Introducing Phonology*. London: Hutchinson, 1984.

Jespersen, Otto. *A Modern English Grammar on Historical Principles*, Part 1 Sound and Spellings. First Published in Heidelberg and Copenhagen:1909-1949. rpt. Meicho-Fukyu-Kai, 1989.

加須屋弘司・矢田裕士・野田哲雄『現代英語音声学』東京: 英潮社、1995.

Ladefoged, Peter, *A Course in Phonetics*. Harcourt Brace Jovanovich, Inc., 1975.

松坂ヒロシ .『英語音声学入門』 東京：研究社、1986.

御園和夫 .『英語音声学研究』 東京：和広出版、1995.

中尾俊夫 .『英語学大系第 9 巻　英語史Ⅱ』 東京：大修館書店、1983.

小野茂・中尾俊夫 .『英語学大系第 8 巻　英語史Ⅰ』 東京: 大修館書店、1980.

大西雅行 .『英語の音声法則』 学書房出版、1973.

Roca, Iggy and Wyn Jonson. *A Course in Phonology*. Malden: Blackwell, 1999.

島岡丘・佐藤寧 .『最新の音声学・音韻論』 東京：研究社、1997.

Sweet, Henry. *History of English Sounds*. Oxford. 1888. Rpt. 明倫出版、1984.

竹林滋 .『英語音声学』 東京：研究社、1996.

安井泉 .『音声学』 東京：開拓社、1995.

安井稔 .『音声と綴字』 東京：研究社、1975.

辞書・ハンドブック

The Concise Oxford Dictionary of English Place-names. The Fourth Edition: Ekwall, Eilert, Oxford, 1985.

A Dictonary of First Names: Hanks, Patoric & Flavia Hodges. Oxford, 1992.

『英語語源辞典』 寺澤芳雄他 . 研究社、1997 年 .

A Dictionary of Phonetics and Phonology. Trask, R.L. . London: Routledge, 1996.

Handbook of the International Phonetic Association. Cambridge University Press, 1999.

Oxford English Dictionary. Second Edtion on CD-ROM(v.4.0): Oxford, 2009.

Phonetic Symbol Guide. Second Edition; Chicago:Pullum, Geoffrey K. and William A. Ladusaw. The University of Chicago Press, 1996.

『リーダーズ英和辞典 / リーダーズ+・プラス』、第 2 版:東京: 研究社、2008.